

相吉沢久 《秋の訪れ》

絵画と結婚した画家

絵画を見て、泣いた経験のある人はいるだろうか。実は、姉を長野県にある梅野記念絵画館に連れて行った時のこと、ホールの壁に架かっていた相吉沢久の作品を見て、姉は理由もわからず涙が出てきて困ったそうである。書家である姉は、普段絵画を見る機会ほとんどなく、相吉沢久という画家も知らなかったという。優れた絵画には、初見の人に対してもこれだけの感動や共感を与える力があるのかと、改めて認識させられたできごとであった。

私自身はそれ以前、初めて参加した梅野記念絵画館友の会のオークションで、当時はまだ認識のなかった相吉沢久の裸婦のデッサンに出会った。美しい線描に魅了されて、何としてもほしいと熱望したので、周囲が気を遣ってくれたのか、出品されていた二点とも思いのほか安価で手にできた。その後、相吉沢久は当時の梅野隆館長が「香り立つ絵」として激賞し発掘した画家のひとりであることを知った。

しかし、未だに知る人ぞ知る画家であり、市場にその作品が出てくることはほとんどない。今回出品した作品も、梅野家のレイ子夫人所有のものを懇願して譲り受けた経緯があり、私にとって貴重な作品である。

秋山 功（群馬県高崎市）

相吉沢久 《秋の訪れ》

油彩・キャンバス 27.3 × 41.0cm 制作年不詳

Aiyoshizawa Hisasi *The Arrival of Autumn*



相吉沢久（あいよしざわ・ひさし／1923 - 1984年）

栃木県生れ。1957年植村鷹千代の現代美術研究所に通い、山口薫、脇田和に学ぶ。62年春陽会展に入選。春陽会事務局書記を務める。66年春陽会展で研究賞。74年春陽会会員。第18回安井賞展に出品。84年没、61歳。

菅野圭介 《秋》

衝動買いの絵

梅野隆さんが菅野圭介の作品を夢中になって集め始めていた頃、私は菅野圭介の絵のどこが良いかが判らず、全くの傍観者でありました。梅野さんが現・東御市に梅野記念絵画館の立ち上げを決意して少し経過した藝林時代のことです。他の作家の名品をドンドン売り払い菅野圭介に集中する迫力に私は強い影響を受けていました。神保町の一画廊でこの《秋》を見つけ退職記念にこの絵をつい！買ってしまいました。典型的な衝動買いです。何時の間にか私の脳に菅野圭介が刷り込まれていたので。さて、買って一六年程経ちますが私のコレクション中で私が好きなベスト五に入る作品です。やはり梅野隆さんの目は、素晴らしい！この作品のゲットでコレクターとしての自信と自覚が持てた一点です。

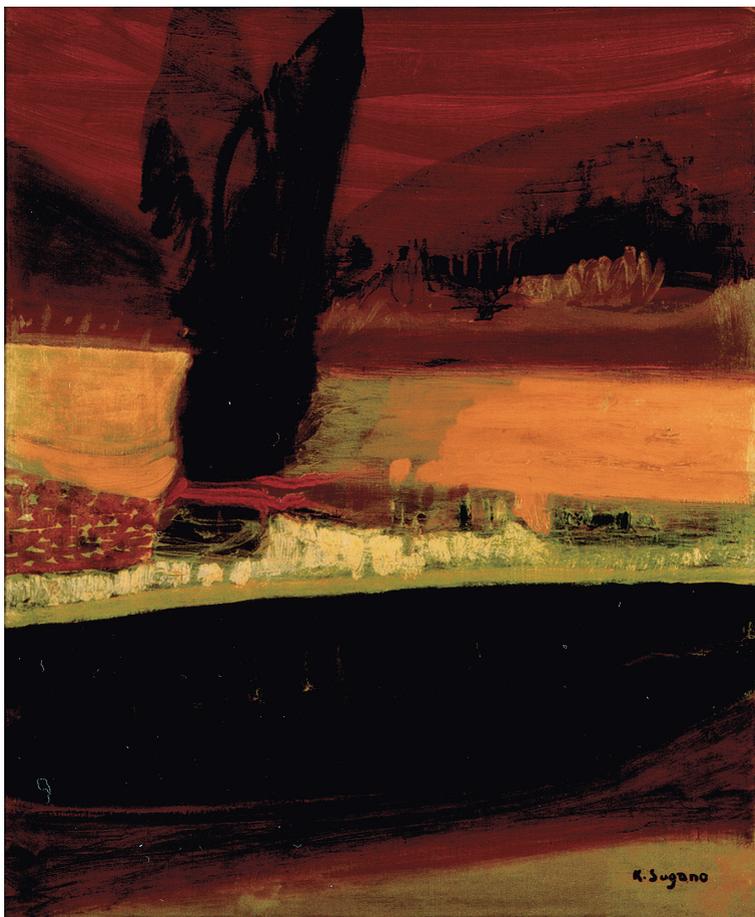
当時の私は、目利きでコレクターの大先輩、星野桂三さん、大川栄二さん、梅野隆さんの影響下にありました。ご三人共、私にとって長い間、そしてこれからもコレクターとして、また美術普及の先生として、尊敬する先達であり、勇気の源泉です。この絵を買った後、私は考えました。そして他の方が見つけた作家では無く、自分自身の眼力で見つけた好きな作家、作品を求めることにしよう！と決意しました。そのように独自の収集のきっかけになった絵でもありません。そうです。私は私です。私は美術普及の専門家「わたくし美術館の会」主宰の尾崎正教さんを頼り、柏わたくし美術館を開館し、そしてコレクター仲間と共に「わの会」を立ち上げてゆきました。ご三人からの独立記念となった作品です。この絵は朝なのか夕なのか、早春なのか晩秋なのか今でも判りません。良い絵です。

堀 良慶（千葉県柏市）

菅野圭介 《秋》

油彩・キャンバス 72.7×60.6cm 1948年頃

Sugano Keisuke Autumn



菅野圭介（すがの・けいすけ／1909－1963年）

東京生れ。京都帝国大学文学部中退。1935－37年欧州巡遊。フランドランに師事。38年独立美術協会賞を受賞。41年日動画廊で個展。43年独立美術協会会員。52年渡米、ブラジルを経て欧州へ、同年帰国。東京で没、53歳。

仲田菊代 《帽子の女》

絵から発する女性のイメージに魅了された？

私は女性には縁遠く、母以外余り知らずに家族（男兄弟四名）、学校、そしてサラリーマン時代も男性社会で育ちました。その様なこともあって女性には憧れの様なものを持っていました。母が高等女学校時代にオシャレをした洋装姿の写真があり、この絵はその写真のイメージに似ておりました。つい「買います」と値段も聞かず手が出てしまいました。

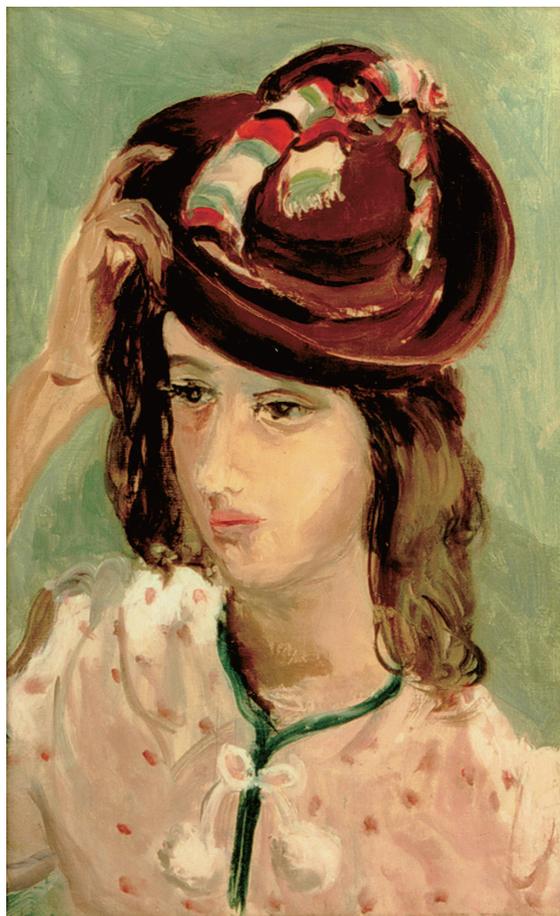
作家は仲田菊代（好江）です。今は無き神保町にあった高木美術に先ず安井曾太郎の影響下の《瓶花》が出て、飛びつき、次にこの絵が出たのです。私は東京国立近代美術館で初期の作品《裸婦像》を見て菊代時代の絵が欲しかったのです。私は仲田好江に名を変えた後に確立した幻想的な絵より、菊代時代の絵が大好きです。この仲田菊代時代の代表作とも思える二点のゲットは後に女流作家のコレクションを進めることになるきっかけとなりました。サラリーマンコレクターでも著名で質の高い女流作家の代表作が買えることも判ったのです。女流作家の作品集にのめり込む契機となった作品なのです。

堀 良慶（千葉県柏市）

仲田菊代 《帽子の女》

油彩・キャンバス 53.0 × 33.3cm 1942年

Nakada Kikuyo A Woman with a Hat



仲田菊代〔好江〕（なかだ・きくよ〔よしえ〕／1902－1995年）

大阪生れ。小出楯重、安井曾太郎に師事。一水会会員。1942年一水会で岡田賞を受賞。47年女流画家協会創立会員。戦後、独特で幻想的な画風を確立する。84年池田20世紀美術館で個展。東京・三鷹で没、93歳。

野田哲也 《日記1976年8月19日》

捨てる神あれば拾う神あり

油彩中心のコレクションをしていた私はいつも「版画」が気になっていました。版画は一人に絞ろうと二、三年かけて二〇―三〇名の好きな作家の中から野田哲也を絞り込んでゆきました。絞り込む際には、(1)海外で評価されている、(2)海外の美術館に収蔵されている、(3)私の経済力で買える等のケース・スタディを行い、論理的に比較しました。でも最終的に決めたのは自身の持つ感性と好きという感情です。感性？ 今から考えると作品の中にある何気ない生活の中に普遍性と作家の只者ではない何かを感じとっていたのでしょうか。

私は野田哲也の代表作《家族の肖像》を欲しいと思っていました。でも《家族の肖像》は作品数が少なく殆どが美術館に収蔵されており、ゲットが難しい作品です。もし、市場に出たら一〇〇万円でも買おうと思ってお金を準備してきました。一度、NYの大手オークション会社で《家族の肖像》が出品されチャンスがありました。NYに行こうと切符も手配する予定でしたが、大阪に転勤間もない頃でサラリーマンの性で仕事を優先、断念しました。千載一遇のチャンスを逃したのです。捨てる神あれば拾う神あり、その後、グランプリ受賞のこの作品を旧知の大阪の老舗画廊から買わないかと突然連絡が入り、ゲット出来、嬉しかった。この作品は売り立て展でタッチの差で逃した作品でした。又野田哲也の友人である鬚嘔が高く評価した作品です。現在ではこの作品を含め野田哲也作品四三点ほどのコレクションが出来ています。大英博物館が一三〇点収蔵されていますが私のコレクションの方が正直優れていると思っています。一五年かけて選んできた作品群です。

さて普遍性？の証拠は国際版画コンクールでグランプリ受賞がもっとも多い作家であることから良く判ります。世界から選ばれた審査員によって最も多く票が集まったことを示しています。野田哲也は只者では無いと心底思っております。

堀 良慶(千葉県柏市)

野田哲也 《日記1976年8月19日》

木版、シルクスクリーン・和紙 70.5 × 47.0cm 1976年

Noda Tetsuya *Diary: August 19, 1976*



野田哲也 (のだ・てつや/1940-)

熊本県不知火生まれ。東京藝術大学院絵画研究科油絵専攻修了。1968年東京国際版画ビエンナーレ大賞を受賞。91年東京藝術大学教授。2014年大英博物館で半年間個展を開催。現在、東京藝術大学名誉教授。

村上肥出夫 《パリの街角》

素晴らしい色彩感覚

村上肥出夫が本郷新のアトリエを訪れた時の事が昭和三九年の東京新聞に掲載されています。「村上の絵は灰色がかった複雑な色調の中に、原色のキラキラと輝く美しい絵であった。二枚、三枚と見せて貰ったが、どの絵にも暗淡な光と厚みがあり、詩的な情趣が漂っている。特に怪異な表現でなく、素直な絵であるが、色彩に対する資質は尋常でないものが感じられた。千住の橋の下に住み、どぶ川の端に漂っていたものの中から拾った、地下足袋の片一方、ゴム引きの軍手、破れたゴムまり、くしゃくしゃのボロ布をずた袋から取り出し『美しいものばかりなんだですよ、この青の良さ、この赤と黒にオレンジ色のような色が混じった感じの良さ』と大切な宝石を手にするように愛情を込めて云った。素晴らしい色彩感覚のある作家」だと、イキイキと記されています。

この作品は北海道立近代美術館の元学芸員だったAさんの旧蔵作品です。実は民間に再就職されたAさんと神保町で飲んだ時、ご事情があり作品を手放すことになったと私に話してくださいました。名品揃いでしたが五〇〇万円が手当出来ず、そのビッグチャンスを見逃してしまいました。後にこの作品がM堂に売られていて幸いにもゲット出来たのです。額の裏を見ると木雨サインがあり、藝林で求められた作品のようです。

堀 良慶（千葉県柏市）

村上肥出夫 《パリの街角》
油彩・板 31.8×40.9cm 1963年
Murakami Hideo A Paris Street



村上肥出夫（むらかみ・ひでお／1933－）

岐阜県土岐生まれ。独学。1961年彫刻家の本郷新に見出され、兜屋画廊を紹介される。63年渡仏、64年渡米、72年渡仏。71年川端康成から個展の評論を得る。79年岐阜県下呂温泉近くに転居。2004、14年大川美術館、梅野記念絵画館で個展。

内田 巖《風景》

武蔵野風景が大好き

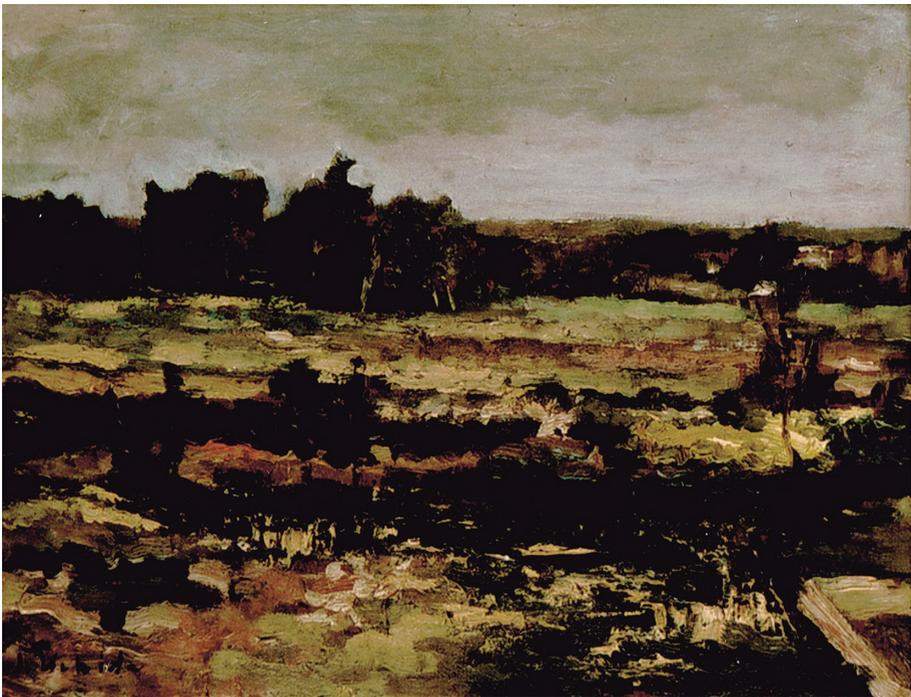
二〇代半ば、私は突然茨城県の土浦に新しく作る応用研究所のプロジェクトの研究管理チームに配属転勤となりました。確か三月五日の日、上野駅から常磐線で土浦駅行きの列車に乗っておりまして。はじめての茨城です。上野駅発車の急行の車両は何処か他の路線で使われているような古い車両で動きはじめる度、連結機のカシャ！っと言う大きな音と、体が揺れるほどの連結衝撃がありました。走り始めた車窓から見える風景は私の育った東海地方と大いに違っていました。二日前に降った雪が未だ残っており、土の色は関東ローム層特有の褐色が雪の影響で湿り黒褐色です。松、杉等の木々も濡れて濃緑、暗褐色です。松戸、我孫子駅を過ぎ、利根川を越えたところには車窓から見える風景は田畑か林になっていました。田舎に来た！との思いがよぎりました。この絵は内田巖が幾度も描いた武蔵野風景と思われませんが、茨城の畑地と林とも良く似ております。関東ローム層がなせる風景です。前日三月四日は東京本社でプロジェクトメンバーの歓迎会があり、土浦駅に降り立った時にはヒンヤリした外気が二日酔いの頬に気持ち良く感じられたものでした。研究所の私の上司に出迎えられました。土浦の前にお土産店では大音響で「予科練の歌」が流れていました。研究所は霞ヶ浦湖畔にある予科練（現自衛隊）の西にある阿見台地にある中島飛行場の跡地に建てられています。管理部門から研究者に転じ、二桁の特許、実案も取ることが出来、新しい製品を世に出すことが出来ました。開発者として一人前に成長出来た場所です。茨城の土浦では結婚、二人の子供も授かり、第二の故郷となりました。あの時から二五年位経った頃、神保町のMアートでこの絵との出会いがありました。

堀 良慶（千葉県柏市）

内田 巖《風景》

油彩・板 31.8×39.5cm 制作年不詳

Uchida Iwao Landscape



内田 巖（うちだ・いわお／1900 - 1953年）

東京生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。29年光風会展で光風会賞を受賞。30 - 32年渡仏。33年光風会会員を辞する。36年新制作派協会創立会員。日動画廊等で個展を開催。東京で没、53歳。

加賀孝一郎 《伊良湖の海》

命の恩人が私？

この絵に描かれているのは日本の百選にも選ばれた白く美しい砂浜の「恋路ヶ浜」です。伊良湖岬灯台から太平洋に面して、日出の石門まで約一キロ。太平洋の荒波をうけて湾曲する、白く美しい砂浜が「恋路ヶ浜」です。「♪名も知らぬ 遠き島より流れよる 椰子の実ひとつ♪」という島崎藤村の抒情詩の舞台となったことでも有名です。

母が亡くなって暫くして愛知県の田原に住む叔母からメロンが届きお礼の電話の中で叔母はこう言いました。

「実は良ちゃん、私の命の恩人なのよ！」と突然ポツリと言ってくれました。戦後間もなく母を頼りに三重に来てしばらく滞在していたようです。「近くの吉崎海岸で命を落とすところだったの！ 夢遊病者のように腰まで海に入った時、あなたが大声で泣きはじめ、その大きな声は親が止めてくれたようだったの」と静かな声で話してくれました。実は叔母は戦時下に両親を失い、幼い二人の兄妹は親戚にたらい回しのようにして預けられました。叔母はとても辛い思いをしてきたのです。三重の伊勢湾にある実家の近くの海岸は昔、塩田があり天皇に献上されたと佐々木信綱の歌にも詠まれている、美しい白砂と緑の松の防風林がありました。きっと叔母はその時、故郷の伊良湖海岸を思いだしていたのかも知れません。叔母は今では子供、孫に囲まれ幸せな老後を送っています。

さて、加賀孝一郎は劉生を師として仰ぎ、「写実一筋」、春陽会で活躍した作家です。大川美術館、兜屋画廊で遺作展が行われ、兜屋で見た作品群のおかげで私はいつしか加賀孝一郎のファンになっておりました。

堀 良慶（千葉県柏市）



加賀孝一郎 《伊良湖の海》
油彩・キャンバス 31.8×40.9cm 1973年
Kaga Koichiro The Sea of Irako

加賀孝一郎（かが・こういちろう／1899－1988年）

岐阜県生れ。1916年名古屋洋画研究所で鈴木不知の教えを受ける。18年岸田劉生に師事。31年春陽展に出品、入選。53年春陽会会員。百貨店を中心に個展。85年稲沢市荻須記念美術館で個展。犬山で没、88歳。

草光信成 《西の空》

夢見る西方浄土

日本の太陽はお伊勢さんの二見ヶ浦から昇り、出雲大社の日御碕ひのみさきに沈むと言われています。私は若い頃、日の出の方が好きでしたが訪れた日御碕に沈む真っ赤な太陽を見て夕日の方が好きになっていました。

日本海の夕日は雲が多く、雲のままに日が射し、徐々に太陽が沈む時に現れる雲が様々な赤のグラデーシオンに染まり、沈む太陽に身動きが出来ぬほど感動を与えるものです。中秋の名月の頃にこの絵を見ると、ススキの花と団子をお皿に乗せ、お月様をお願いをした頃のことを思い出します。私は西方浄土を絵の中に見ることが出来る年代になってきています。

この小品は「わの会」会員だった故岩本昭さんの旧蔵品です。「洲之内徹コレクション」に紹介されている草光信成の作品より良いとは、この絵を見た後藤洋明さんの感想でした。

この絵を見て、私の机の中に入っていた、スクラップブックに入っていた文をご紹介します。「何かを見たということは、その時の環境や条件が前提となっているのであり、きわめて相対的な認識であると言わざるを得ません。その背景には、その場の状況や個々人の感受性、あるいは歴史認識もあるでしょう。美術を見るという行為は、必然的にそうした認識の違いを前提としているのです。突き詰めて言えば、見る」とは視力の問題ではなく、風土や国家によって成り立っている文化の問題ということが出来ます」

堀 良慶（千葉県柏市）

草光信成 《西の空》

油彩・キャンバス 33.0 × 24.0cm 1930年

Kusamitsu Nobushige *The Sky to the West*



草光信成（くさみつ・のぶしげ／1892 - 1972年）

島根県出雲生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。27、28、30年帝展で特選。38年従軍画家として戦地へ赴く。55年新世紀美術協会創立に参加。70年没、80歳。

水野 朝 《ゆうちゃん》

バナナの想い出

この『ゆうちゃん』は、朝さんの作品の中でも、とても優しく豊かさを感じる絵です。小学生の頃、近所に『てるみちゃん』という、開業医のお嬢さんがいました。彼女の家では、一本丸ごとバナナが食べられます。一方、私の家では男四人兄弟が一本のバナナを四等分しておりました。しかもバナナが食べられる機会は彼女より少ないようです。今でもその事を覚えています。気の強い女の子で何時もの自慢話に閉口しながらも羨ましく思っていたのでしよう。小学一年の時、先生や皆の前で彼女と砂場で相撲をとり、上手投げで見事に投げ飛ばされ、砂を噛んだ事を今でも克明に覚えています。

その『てるみちゃん』はとてもお洒落でした。彼女が成長して奈良女子大学に進学したところ、街で出会ったお洒落な『てるみちゃん』はちよつと美人でした。

還暦のお祝いを兼ね同窓会が故郷でありました。受付の横で『てるみちゃん』が友とお喋りしており、私を目ざとく見つけ、私は彼女に捕まってしまうました。昔の話、現況について話が弾みました。彼女は年相応にお婆ちゃんとなりましたが相も変わらずお喋りでした。近くで悪童たち仲間が群れており、私を見つけ、早くこっちへ来い！とはやしたてておりました。小中学校のあの頃と皆年は取っても余り変わらず涙が出る位の懐かしさの中におりました。朝さん！懐かしい『てるみちゃん』を思い出させてくれて有難う。

物故作家ばかりでは面白くない。絵画において物故も現存も、男も女も、具象も抽象も関係ない。現存で女流作家の水野朝さんの企画展を羽黒洞さんの支援をいただいて開催出来ました。固定化していた私の美術普及活動に於いて一つの壁を破ることが出来た嬉しい出来事、企画展でした。企画展後、朝さんからラブレターをいただいたのはとても嬉しいことでした。

堀 良慶（千葉県柏市）



水野 朝 《ゆうちゃん》
日本画・和紙 65.2 × 53.0cm 1968年
Mizuno Asa Little Girl, Yu-chan

水野 朝（みずの・あさ／1945－）

名古屋市生れ。1959年中村正義に師事。無所属。68年日本画廊で個展。84年羽黒洞の企画により朝日アートギャラリーで個展。2000年『水野朝画集』刊行。09年画業50年記念の個展を、羽黒洞、日本画廊、梅野記念絵画館等で開催。

鞍掛徳磨 《老母》

学校を休んでまで見に来た女高生。

この作品は読売新聞、二〇〇一年二月四日(日)「絵は風景」に一ページ、全面に掲載された作品です。この作品が掲載された所、北海道から九州まで全国からの多くの来館者に恵まれました。新聞掲載の翌日の月曜日の午前、高崎市から女子高校生が来て《老母》を余りにも熱心に見ていたので、帰られる時、老母は如何でしたか？とお聞きした所、「お婆ちゃんに似ていたから」と話してくれました。実は私の買った理由も彼女と同じで、私の父方の祖母にも似ていたからです。女高生が帰ってからアッ！と気が付きました。今日は月曜日です。学校があったのです。学校を休んでこの絵を見に来たのです。何だかちょっと胸にジーンとくるほど嬉しいことでした。

この読売新聞の掲載記事は美術記者芥川喜好さんが取材、執筆されています。その一部を紹介します。「この空間と人間の大きさをどうするか、えらく苦労しました。空間が大きすぎて、自分では失敗作だと思っている。個展を企画した坂崎乙郎さん(美術評論家)に「ちよっと弱かったですね」と言いました。そしたら坂崎さんは、愛情に勝てるか！と言っています」。当時の鞍掛さんの絵は原爆の影響で全運命を一人で引き受けるような逃れがたい暗さや重さが、画面を圧していました。洲之内徹さんは「クラさん、もつとのんきに描け。鼻歌をうたうような気持ちでやれ」と言われたが、なかなかそんなわけには行かなかったそうです。鞍掛さんは原爆投下後一週間後に学徒動員で広島に救援隊として派遣されたのです。死体、残骸の後始末等その時の体験が若い作家にとって余りにも衝撃的であったのです。

堀 良慶(千葉県柏市)

鞍掛徳磨 《老母》

油彩・キャンバス 162.1×97.0cm 1971年

Kurakake Tokuma *Old Mother*



鞍掛徳磨 (くらかけ・とくま/1930-)

広島県生れ。1954年吉岡憲に師事。日本大学芸術学部美術科卒業。71、72、73、77、78年安井賞展入選。76年現代画廊で個展。2000年ギャラリー川船で個展。13年キッド・アイラック・アートギャラリーで個展。

森田信夫 《アムール河の初雪》

厳寒の地で何を想い描いたのだろうか

この作品、額の裏板と挿し箱には「ソビエト旅行」と題されているがキャンバス裏側には、森田の直筆で「アムール河の初雪」(シベリア・ハバロフスク)と書かれている。一九五六年の日ソ国交回復で横浜からナホトカの定期航路が開設され、ハバロフスクはモスクワへ向かう經由地となったことから、多くの旅行者が訪れるようになったという。森田の写生旅行は、多くの画家が向かう欧州ではなく厳寒のソビエトだった。おそらくそれ以前にも訪れたい地であったのだろうか。ハバロフスクの岸边より初雪のアムール河をのぞみ、多くの想いを抱きながら筆を運んだ様子が見える。

絵画教授として学生たちのために構図・彩色ともに写実のお手本となるべく丁寧精緻に仕上げた。

こうした正統派の絵が一枚は欲しいものである。

野口 勉 (埼玉県鶴ヶ島市)

森田信夫 《アムール河の初雪》

油彩・キャンバス 40.9 × 53.0cm 1971年

Morita Nobuo *The First Snow of the Year on the Amur River*



森田信夫 (もりた・のぶお / 1921 - 1996年)

京都生れ。1947年東京美術学校油画科卒。49年二科会特賞受賞。62年二科会会員。62 - 66年女子美術大学、桑沢学園で講師を務める。64 - 78年東京造形大学絵画科主任教授。96年没、75歳。

森清治郎 《サンクルールの眺め（セーヌ河）》

重厚な画質と深い色彩

一九五七年に渡仏、五九年まで欧州各地を巡る。現地では仏在住の彫刻家・嘉野稔に世話になる。嘉野は愛車ルノーで仏各地を案内、そのおかげで森はモンパルナスを拠点に仏全土のスケッチができた。

その中の一枚、セーヌ河からみたサンクルールを紙に油彩で見事に仕上げた。

モチーフとなる建造物の質感を強調することで異国の空気感を表し、塗り重ねられた重厚な画質と深い色彩は丹念に描きこまれ、単なる写生図にとどまらない。

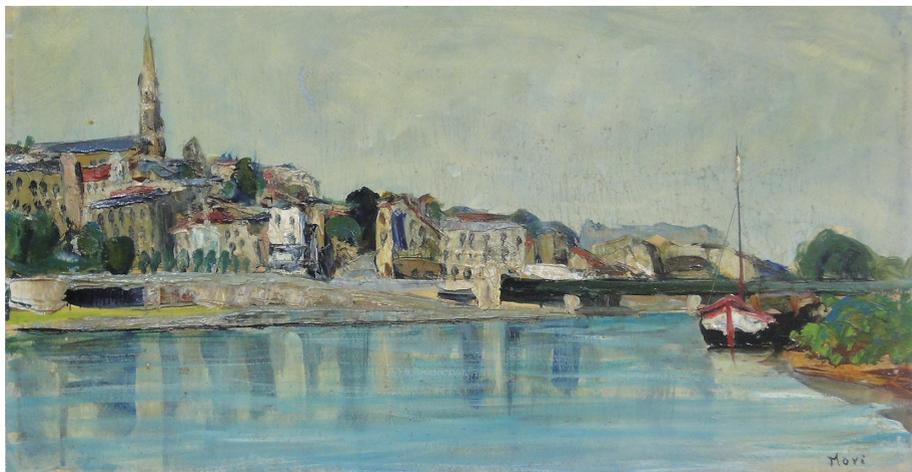
この作品は、帰国後各地の展覧会で展示され、およそ五〇年を経て私の手元に届くことになった。セーヌ河の辺で写生をしている森の姿が浮かんでくる。

野口 勉（埼玉県鶴ヶ島市）

森清治郎 《サンクルールの眺め（セーヌ河）》

油彩・紙 26.0 × 49.5cm 1958年

Mori Seijiro A View of Saint-Cloud (The Seine)



森清治郎（もり・せいじろう／1921 - 2004年）

愛知県生れ。1939年東京美術学校図画師範科入学。47年紅土会に入会。50年日展入選。光風会展で52年ブルーブ賞、53年南賞、54年光風特賞を受賞。57年渡欧。2004年没、82歳。

中村研一 《風景》

テラスの椅子に座る画家 眺める先

中村は、エコール・ド・パリ全盛の一九二三年から五年ほどパリに滞在し、パリ画壇のアツスランに師事し灰色を基調とした穏健着実なアカデミズムを学んで帰国したという。

その後、「灰色」は中村の基礎となり多くの作品に表現された。

眺める先の海景はブルーであるはずが灰色系でくすみ、極めて落ち着いた雰囲気醸し出し
ている。

加えてこの大胆な構図は見方によっては眺めに情趣が欠けて単調にも思えるが、先の灰色を
描きたいためにこの図にしたと思えるほど頑なだ。

写生地は、他の類似作を参考にすると「瀬戸内海」が有力である。

数年前、所定鑑定人の馬目世母子氏に鑑定していただいたところ、「中村はこうした構図と色
合いを好んでいた。良い作品と思う」と感想を述べられた。

題名は不詳なので仮題もつけていないが、あえてつけるなら「テラスの椅子に座る画家 眺
める先」としたい。

野口 勉 (埼玉県鶴ヶ島市)

中村研一 《風景》

油彩・キャンバス 37.9 × 45.5cm 1940年頃

Nakamura Kenichi A View



中村研一 (なかむら・けんいち / 1895 - 1967年)

福岡県生れ。鹿子木孟郎の内弟子。本郷洋画研究所に通う。1920年東京美術
学校西洋画科卒。帝展特選。23 - 28年渡仏。サロン・ドートンヌ会員。帝
展で連続特選。帝国美術院賞を受賞。50年日本芸術院会員。東京で没。72歳。

安井曾太郎 《花と太陽》

モンドリアン？ マチス？ ホックニー？ いえ安井曾太郎です！

「なんと洒落た感覚」、コレクションの動機である。風呂敷の下絵デザインではと言われてるが定かでない。昔の大家は、大上段に構えないこのような気負いのないセンスの中には実は懐の深さをさりげなく潜ませている。安井、梅原、大観といった我が国の美術史をけん引してきた大家でさえ、「たしか教科書では見ましたが？」という若手作家が席卷する時代に急ぎ足で移行しつつある我が国のアートシーン。「人と違ったことを、作品を」という言葉を信じ、苦悩のあげく絞り出した結果より、沸いたイメージをそのまま「禅」のごとき心境で形にしたものの方が見る側により鮮烈な感動を与える、できるようでいて実は一番難しい絵画の「醍醐味」をこの作品の中に見た。この境地・技の出現に至るまでの道のりは決して平坦でない。

前所有者は、「今となっては幻の額装人・岡本ビヨンスンさん旧蔵のローズウッドを使って吉井弘雅堂で新たに額装した」と言う。心に染みだ作品に出会った「感動」の共有も、コレクターとしてこの作品を所有する喜びを倍加させている。

安井曾太郎は、明快な色調と平明な描写に線描を加え、多く描いた人物画や静物、風景の中に独自の画境を示した。日本美術家連盟の創立とともにその会長に推され終生同連盟の発展につくし文化勲章も受章した。誰もが認める我が国洋画史の巨星が描く「洒落」の世界に微笑み。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

安井曾太郎 《花と太陽》

水彩、コラージュ・キャンバス 69.0 × 69.0cm 制作年不詳（昭和30年代）

Yasui Sotaro *Flowers and the Sun*



安井曾太郎（やすい・そうたろう／1888 - 1955年）

京都府生れ。1904年聖護院洋画研究所に入所。浅井忠、鹿子木孟郎らに師事。07 - 14年渡仏。15年二科会展に出品、会員推挙。36年一水会創立会員。44年梅原龍三郎と共に東京美術学校教授。52年文化勲章。神奈川県湯河原で没、67歳。

渡辺 学 《海女笑う》

生涯銚子の海を描き続けた日本画家・今年が生誕一〇〇周年（二〇一六年）

我々夫婦が生まれ育った千葉という地域は、概して名を成す絵描きの少ないところだと思っているが、その中で渡辺学は日本画の団体「創画会」に所属し、毎年会場の中で異彩を放つ勇壮な大作を描き続けた。今年は何のような驚きを与えてくれるのか、内心を膨らませながら秋の上野の会場に急いだ思い出が懐かしい。漁村で繰り広げられる海女や漁師たちの姿を渡辺独特なタッチで描く骨太な作品に、期待が裏切られたことは一度もなかった。この《海女笑う》は、小品ながら、「私の軀に心に船底の牡蠣のようにこびりつき結びついてきた」と渡辺に言わしめた銚子という地に根差して追い求めたテーマが象徴的に表現されていて好ましい。

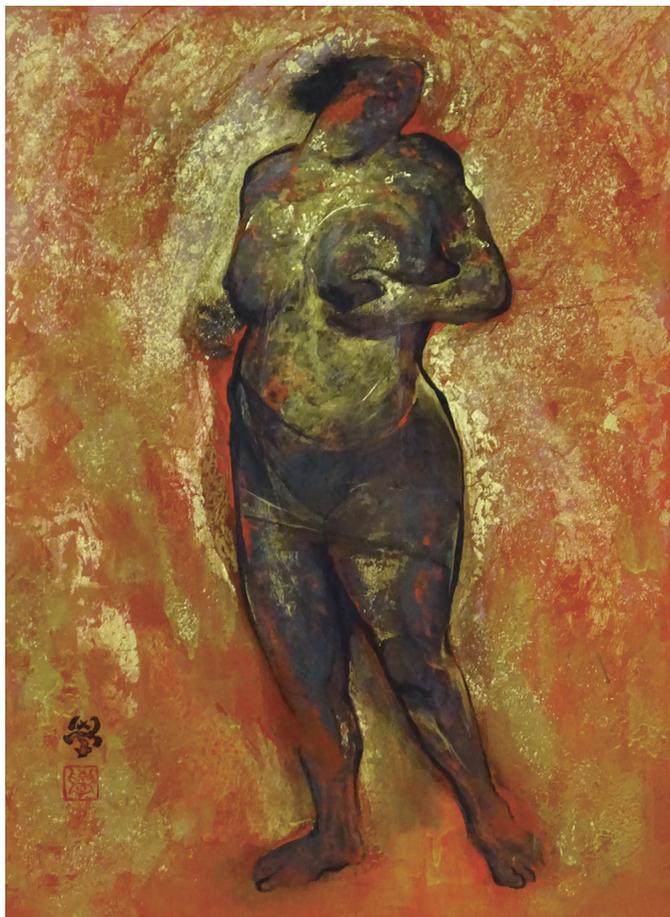
この原稿を書こうとしているタイミングで「銚子出身の日本画家、渡辺学の生誕一〇〇周年を記念した海の自画像展と題した展覧会が始まった（二〇一六年一〇月）」という新聞記事が目にとまった。「あーそうだったのか」という思い以上に、「渡辺は八四歳で他界するまでの生涯を郷土の銚子で過ごしたが、市内で展覧会が開かれるのは初めて」という事実の方に目が奪われた。長女の百合子さんの呼びかけで、市内の美術協会や文化団体協議会が実行委員会をつくり実現したとある。改めて「わの会 書籍プロジェクト」と重なる不思議を感じながら筆を進めた。その通じる心とは？「良きものでありながら、何もしなければ風化していつてしまいうなもの、志をもって掘り起こし歴史に残るよう顕彰し続けるために必要な『わの力』」

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

渡辺 学 《海女笑う》

岩絵の具・紙 47.0 × 33.0cm 1980年

Watanabe Gaku A Woman Diver Laughing



渡辺 学（わたなべ・がく／1916 - 2000年）

千葉県銚子生れ。1941年東京美術学校日本画科卒。59年新制作展で作家賞。60年新制作協会会員。62年日本美術展で優秀賞。68年松屋で「朝倉摂・渡辺学二人展」。71年東京造形大学講師。創画会に出品。銚子で没、84歳。

朝倉 撰 《静物》

「舞台美術家」朝倉撰としての活躍の香りが漂う初期日本画です

舞台美術家としての朝倉撰を知る人が多い。一九四九年第一回アンデパンダン展に、日本画の前衛作家として出品した活躍を知る人はほとんどいない。この作品は我が国を代表する舞台美術家への変遷を十分予感させる「モダン」との出会いであった。

今回の書籍プロジェクト参加を決め、朝倉撰、渡辺学作品をセレクトした後で、実は一九六八年「朝倉撰・渡辺学」日本画二人展を松屋で開催していたことを知る。六四年、五年にかけて「日本画研究会」が開かれ、朝倉は中心となって活動し、渡辺も参加していた。六六年に開催された「針生一郎が選んだこれが日本画展」に朝倉の名があり、翌年の二回展では朝倉の名が消え渡辺の名が加わる。一九六八年の日本画一八人展に初めて二人の名が連なり、同年に二人展を開催したことになる。先の「日本画研究会」は、その時代の日本画家それぞれがいか生きるべきかを考え討議する真剣な集まりであり、その後「新制作協会日本画部」から「創画会」（一九七四年）へと変遷していく。

現在、戦後の特定の時期を振り返る展覧会で、朝倉、渡辺の名を目にすることはあるがその機会は少なく寂しい。それ以上に、五〇年も前の時代に「日本画研究会」で議論されたような問題を見る側に強く訴えかけてくるような作家・作品に、今の時代なかなか出会えないことが残念である。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

朝倉 撰 《静物》

岩絵の具・紙 24.0 × 43.0cm 1960年頃

Asakura Setsu Still Life



朝倉 撰（あさくら・せつ／1922－2014年）

東京生れ。父は彫刻家の朝倉文夫。16歳で伊東深水に弟子入り。1941年文展入選。51年新制作展入選。53年上村松園賞。68年「朝倉撰・渡辺学二人展」。70年以降活動の場を舞台美術に移す。82年日本アカデミー賞優秀美術賞。東京で没、91歳。

原 勝郎 《パリの郊外》

「あぶらえ」らしい油絵 ホツとするタッチです

当たり前の油彩画である。久しぶりに、この色使い、このタッチを前にして、何かホツとするのはどうしてであろう。今の洋画の世界、速乾性の強いアクリルの使用が中心になり、更にはコンピューター処理による平板な作品作りも加わる等、様変わりが激しい。日々そのような空気に感性が染みていく中で、油絵の具による原勝郎独特の流麗な筆の運びを感じさせてくれるキャンバスに、改めて「描く」という絵描きの生の息遣いを見るからなのかもしれない。

原勝郎は、我々の故郷である千葉県の出身である。地元の県立美術館にまともな作品がコレクションされている。常設展示で作品を目にする機会も多かった。その都度「ぼくはいつも思うことであるが、絶叫して存在を示す者は恐ろしくないが、沈黙が存在であり、沈黙が存在の意味をしらせているような存在は恐ろしい」（『原勝郎画集』）の中に掲載されている土方定一の「原勝郎さんのこと 生活のある絵」より）という言葉を思い浮かべながら見ることを常としている。

コレクションを長年続けてくる過程で、見る側の眼の変化によって好みの作品も変わってきた。これからも変化していくに違いない。実は絶叫して存在を示す作品も好きだが、どんなときでも原勝郎の油絵から聞こえてくる「これこそ絵画だ」という小さなつぶやきに、心のつながりが戻っていくに違いない。

伝説になりつつある洲之内徹氏経営の「現代画廊」にさりげなく常設されていた原勝郎作《静物》が懐かしく目に浮かぶ。

今回の作品は、評論家・田近憲三氏旧蔵とされる。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）



原 勝郎 《パリの郊外》
油彩・キャンバス 31.0×53.0cm 1937年
Hara Katsuro *The Suburbs of Paris*

原 勝郎（はら・かつろう／1889－1966年）

千葉県大網白里町生れ。葵橋洋画研究所に学ぶ。1918年ハワイに渡り、20年渡米、22年渡欧。24年以降帰国する39年までサロン・ドートンヌ展に出品。42年日動画廊で個展。49年新樹会会員。50年木内克と北莊画廊で二人展。東京で没、77歳。

菅 創吉 《ハルピンの追憶》

今でも隠れファンの多さではピカイチかも？

洋画家としての名を知る人は少ない。しかし隠れファンの多さはピカイチ？ そんな絵描きが菅創吉である。生涯団体に属さず、自由な制作態度で独自の足跡を残した。幼い時から画家を目指したが、本格的に絵描きとしての道（後の画歴のうえで）が定まるのは五〇歳を過ぎて開いたなびす画廊（東京）での個展で作品が評価された後というから、遅咲きという言葉を通り越している。更に輪をかけるような展開が起こる。六〇歳間近になってからの渡米と目覚ましい活躍である。シスコ、ロス、NYでの個展、一九七一年にはブルックリン美術館に出品する。渡米中に手がけたカラージュ、アッサンブラージュ、晩年はオブジェ、彫刻まで発展した、枠にとらわれない一層の活躍の足跡が記録に残されている。

一九八二年に静岡県伊東市池田二〇世紀美術館で「菅創吉の世界展」が開かれた。画家の死はその会期中に劇的に訪れ、その後の「日曜美術館」（NHK）での紹介によって、表題「隠れファン」の多さではピカイチの評価がスタートし現在にまで至っている。

今回の《ハルピンの追憶》は、若いころ勤めていた満州鉄道時代に旅行で訪れた地？の思い出の一端をイメージしたもののか。簡略化されたユーモラスな形と渋い色彩によって構成される菅創吉作品の特徴を語るにはうってつけの作品である。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）



菅 創吉 《ハルピンの追憶》
油彩・キャンバス 32.0×40.0cm 1973年
Suga Sokichi Recollection of Harbin

菅 創吉（すが・そうきち／1905 - 1982年）

姫路市生れ。絵は独学。カット、政治漫画、図案で生計をたてる。戦後、新聞挿絵を描く。1960年現代画廊個展。63 - 72年渡米。ロス、シスコ、NYで個展。永住権取得。ユーモラスな形と禁欲的な色彩の中に鋭く洞察深い認識を見せる。東京で没。77歳。

オチ・オサム 《フオンタナに捧ぐ》

小さな炎

なぜかしら気になる作品である。絵と思うが、キャンバスではなく五〇ミリもある木を絵柄に合わせて斬り抜いて描いている。中には額の外まで飛び出して描いてある作品もある。今であればそれ程でもないかもしれないが、当時としては異質な作品ではないか、型破りである。オチは九州派創立の一人で後に菊畑茂久馬（著作多数）と脱退するもまた戻っている。具体・ネオダダ・暗黒舞踏派等と軌を一にして出来ている。九州派のスローガンは反芸術・反東京である。アスファルトあり、叩き壊しあり、燃やしあり、労働運動あり、何でもあり、作品が残らないのが九州派らしく、そのエネルギーは凄まじいの一言に尽きる。この時代からみればこの作品は慎まじやかで清楚にさえみえる。

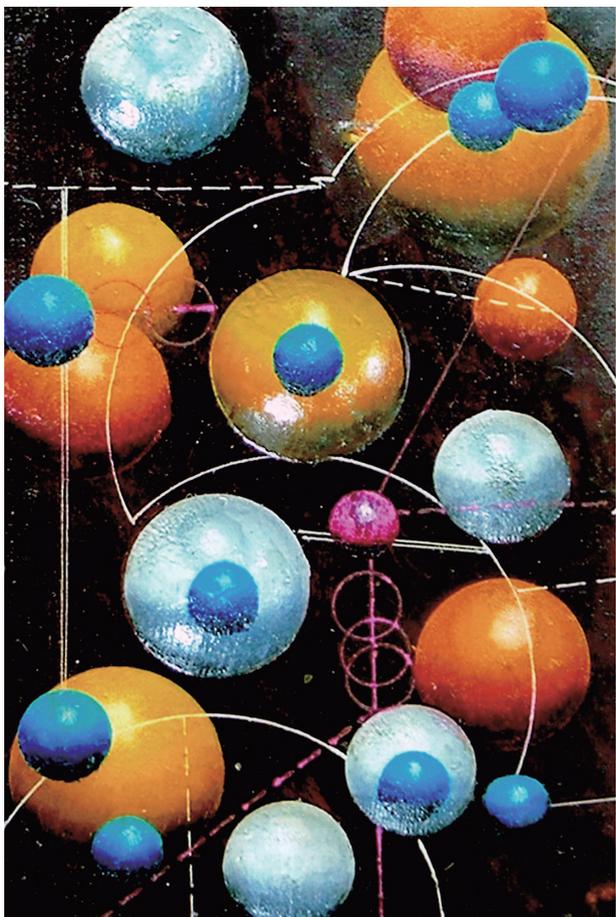
フオンタナの空間芸術に共感するような画題、一見すればスマートにさえ思える平面或いは立体とも見える球体の奥から、此方を見て離さないその先に貴方は何を見る事が出来ますか。私には何か極々小さな炎が見える気がするのです。

山瀬一洋（福岡県粕屋郡）

オチ・オサム 《フオンタナに捧ぐ》

油彩・木 30.0×20.0cm 制作年不詳

Ochi Osamu *Homage to Fontana*



オチ・オサム（おち・おさむ／1936－2015年）

佐賀市生れ。1955、56年二科展入選。前衛芸術集団「九州派」結成に参加。62年読売アンデパンダン展に出品。66－69年渡米。70年福岡文化会館で個展。78年サンフランシスコの画廊で個展。2015年没、79歳。

山下 清 《ちぎり絵「富士さん」》

愛すべき頑固者

このちぎり絵を見ると、何かしらホッとします。ありふれたモチーフであり特にちぎり絵と言う以外これといった特徴はない絵なのだが、心をいやされる気がするのは私だけだろうか。この絵に縁のあった方は、戦前から北九州で商いをされていた方で、私がお会いした時には、既にかなりのご高齢であったとお見受けしたが、気さくで明るいお人柄の人だった。私がお店に遊びがてら伺った時などに、山下清さんのエピソードを聞かされた思い出がある。お話の中で、清さんは昼頃になると店先に現れていたそうで、ある日、店先に現れた清さんに向かって「絵をかけ、絵をかけ」と言ったところ、清さんはご主人に対して「僕はかかない」と頑なに言っていたそうで、そのころを思い出してか、ポツリと「あの頑固ものが」と言っていたご主人の顔を思い出す。

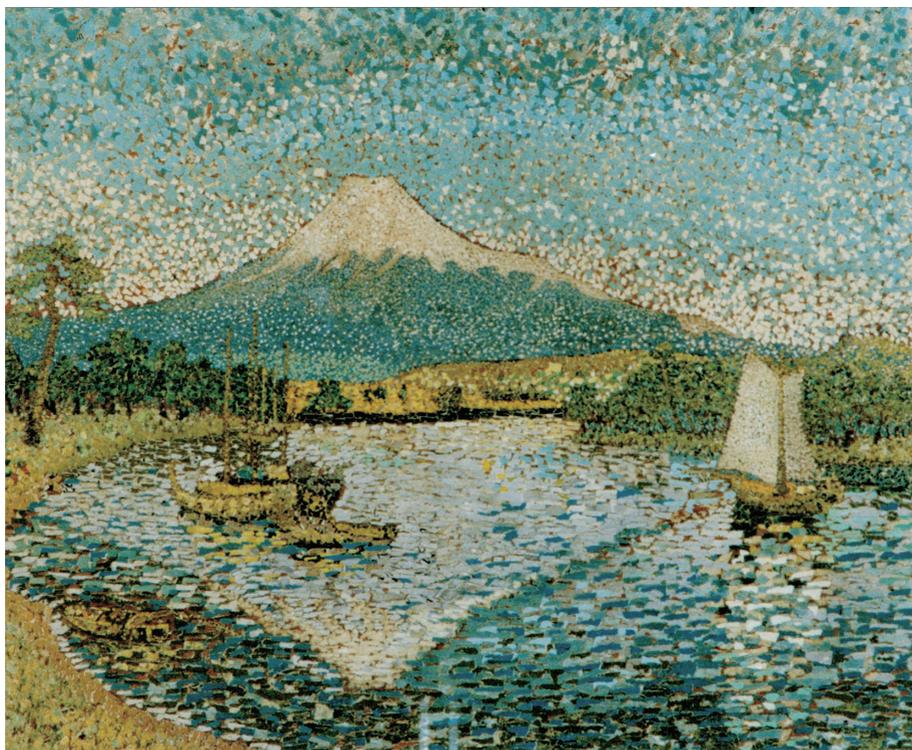
「ご主人の話聞きながらも心の中で、「私にとっても、あなたは敬愛すべき頑固者ですよ」と言いながら笑っていた当時の事がなつかしい。今はそのご主人も亡くなられ、手元に、この絵だけが残っている。」

山瀬一洋（福岡県粕屋郡）

山下 清 《ちぎり絵「富士さん」》

ちぎり絵、色紙・新聞紙 28.0 × 35.0cm 制作年不詳

Yamashita Kiyoshi Chigiri-e (a collage of colored paper pieces): Mt. Fuji



山下 清（やました・きよし／1922 - 1971年）

1922年生れ。市川市の八幡学園に入園。ちぎり絵による点描風貼り絵を学ぶ。39年式場隆三郎に認められる。39年展覧会開催。40年から放浪生活。55年画集刊行。71年没、49歳。

斎藤与里 《知多早春》

影のない色彩の春

本名は斎藤與里治、明治一八年、埼玉県加須市齊藤春五郎の次男として生まれる。明治三九年、鹿子木孟郎、伊庭慎吉と共に渡仏、パリのアカデミー・ジュリアンで絵画を学ぶ。明治四五年、ヒュウザン会（岸田劉生・高村光太郎・萬鉄五郎他会員）を設立、第一回展を開催。昭和三四年四月、加須市名誉市民第一号となり画業と人格を称えられる。同年五月三日永眠。

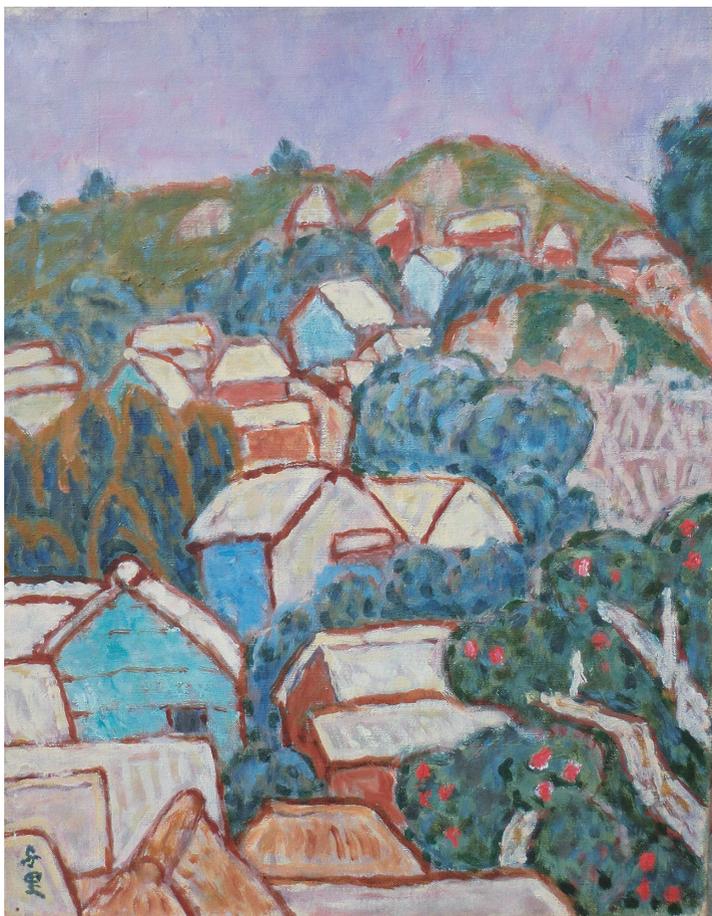
この絵は昭和二五年作、六号の小品ですが教え子の一人の故・沢田利一氏の所蔵で、沢田夫人に譲っていただきました。額の裏を見ますと「知多早春 一九五〇 斎藤与里」「斎藤与里作 知多早春 沢田蔵」と書かれた紙が二枚はってありました。沢田利一氏が斎藤与里先生の作品として大事に大切にしていたことが伺えます。ほくさい美術館としても、郷土の大先輩、名画として大切にしていきたいです。

田部井仁市（埼玉県加須市）

斎藤与里 《知多早春》

油彩・キャンバス 41.0 × 32.0cm 1950年

Saito Yori The Early Spring in Chita



斎藤与里（さいとう・より／1885 - 1959年）

埼玉県生れ。聖護院洋画研究所に学ぶ。1906 - 08年渡仏。帰国後、後期印象派を紹介。12年ヒュウザン会（後のフェウザン会）を結成。文展で特選。第8回帝展で特選。春陽会会員。槐樹社創立会員。東光会創立会員。帝展、日展の審査員。東京で没、74歳。

松永敏太郎 《藤椅子で読書する女》

ガラス越しの風景が素晴らしい絵

私の知人の紹介で松永敏太郎氏の長男、松永健氏の自宅を訪問した時、二〇点ほどの絵を見せていただきました。絵はその時に《山茶花を見る女》と一緒に購入したうちの一点です。キャンパスの木型は壊れており、絵は床に置かれ一枚の布切れのようにヒラヒラしておりました。私はこの絵をよくよく見て、松永敏太郎氏が精魂を込めて描きあげた五〇号の大作であると感じました。本人が非売とした《山茶花を見る女》と同等あるいはそれ以上の傑作であると思いました。

修復は羽生市の斎藤栄一先生に頼みました。松永敏太郎氏の作品を沢山見ている斎藤栄一先生は、キャンバス地に裏張りをし、木枠を新しくして、どこを修復したのか分からないほど、松永敏太郎氏の絵そのものに戻してくれました。後日、松永健ご夫妻に見ていただいたところ「私が手放した父の絵がこんなに立派になって、田部井さんがどれだけお金をかけたか分からないですが、本当にありがとうございます」と言っておられました。

斎藤与里先生の後継者であり一番弟子の存在の松永敏太郎氏の作品を二点持てたことをとても嬉しく幸せに思っています。

田部井仁市（埼玉県加須市）

松永敏太郎 《藤椅子で読書する女》
油彩・キャンバス 115.0×90.0cm 1965年
Matsunaga Toshitaro A Woman Reading Seated in a Wicker Chair



松永敏太郎（まつなが・としたろう／1918－1986年）

埼玉県生まれ。1936年東京美術学校本科油画科入学。藤島武二教室に入る。41年に斎藤与里に師事。47年東光会展で東光賞。48年東光会会員。68年日展で《晩秋の庭》が特選を受賞。86年没、68歳。

此木三紅大 《習作裸婦》

独り占めしたい私だけの裸婦

私の絵のコレクションを展示したほくさい美術館の原点は、此木三紅大先生と松山庭園美術館の此木紀子館長に出会えたことです。那須高原私の美術館でガラス絵を少しづつ購入しつつ、松山庭園美術館にも出かけました。油絵を三点ほど購入した後、此木三紅大先生に「こういう絵はどうですか？」と見せていただいたのが、この《習作裸婦》でした。一度目は返事をせず、二、三カ月後に再度見て、購入を決意したと思います。

此木紀子館長から「この絵は安いとか、この絵は有名画家のものだから将来高くなるという理由で買ってはダメですよ。田部井さんがこの絵を好きになり、どうしても欲しいと思ったら買いなさい」ときつく言われたことは今でも覚えております。今はその気持ちを強く意識しながら絵を見ているつもりです。

この絵は、此木三紅大先生がイタリア留学から日本に帰って間もなくの作品だと思っています。時間が経つにつれ好きになり、独り占めしたい絵になってきています。

田部井仁市（埼玉県加須市）

此木三紅大 《習作裸婦》

油彩・キャンバス 101.0 × 60.0cm 1968年

Konoki Mikuo Study of a Female Nude



此木三紅大〔三男〕（このき・みくお〔みつお〕／1937－）

東京生れ。武蔵野美術大学、ローマ・アカデミア美術大学卒。1976年青枢会創立。油画、彫刻を制作。95年那須高原私の美術館、98年松山庭園美術館、2010年ほくさい美術館が開館。06年上海朱屺瞻芸術館、08年瀋陽国立魯迅美術大学美術館で個展。

野見山暁治 《ほほづえ》

絵の下にもう一枚が

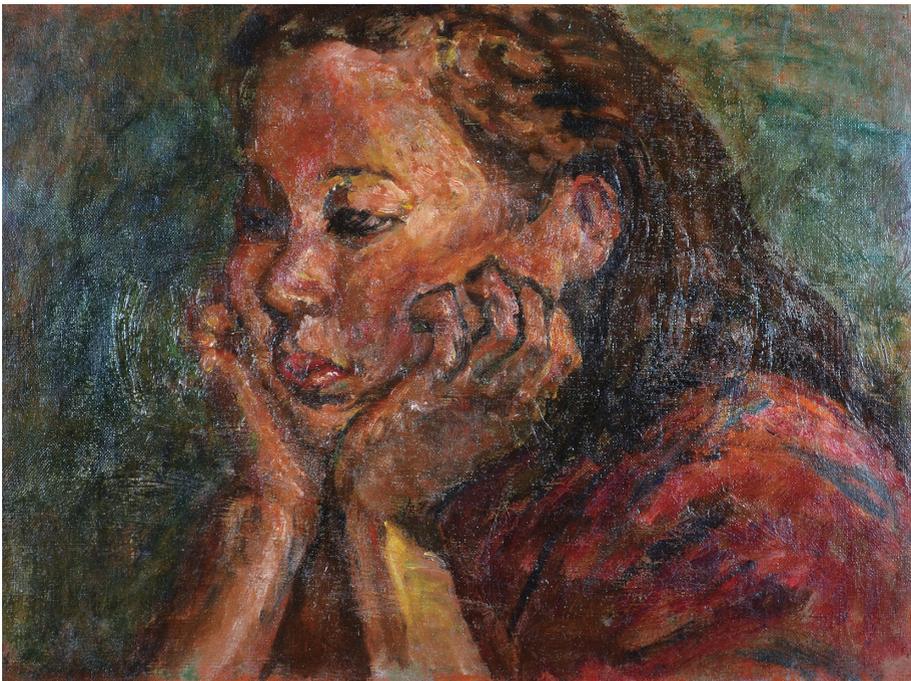
この絵は先生の妹さんを描いたものだが、傷みが激しかったため修復に出したとのことだ。透視したらこの絵の下に何かピエロのような他の絵があり、それが先生は自分の絵なのか、他の人の絵なのかよく覚えていない、ということだった。当時、キャンバス等の使い回しは絵描きの中ではよく行われていたようだ。どちらにしてもとても気に入っている絵の一枚には変わりはない。

中村儀介（千葉県木更津市）

野見山暁治 《ほほづえ》

油彩・キャンバス 33.5×45.2cm 1951年頃

Nomiyama Gyoji *Resting the Chin on the Hands*



野見山暁治（のみやま・ぎょうじ／1920－）

福岡県生れ。1943年東京美術学校洋画科卒。52年渡仏。58年安井賞受賞。64年帰国。68年東京藝術大学助教授、後に教授となる。81年藝大を辞職。97年「無言館」設立に尽力。2000年文化功労賞、14年文化勲章を受章。

木村忠太 《初夏B》

病気の始まり

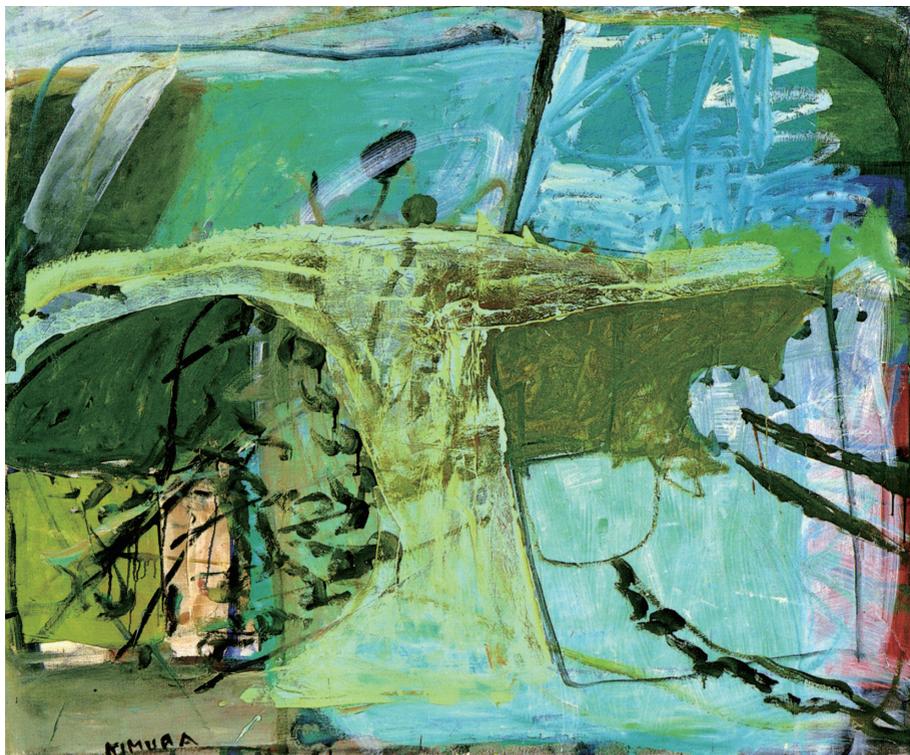
一九八七年の九月初旬、日本橋の高島屋で開催されていた「木村忠太展」にフラリと立ち寄った。初めて目についたこの一枚の絵に即魅せられ、一目惚れしてしまった。一晩考え、翌日高島屋に出向き、当時の私にとっては高額ではあったが思い切って購入した。これが私のコレクションという病気の始まりでもあったのだ。

中村儀介（千葉県木更津市）

木村忠太 《初夏B》

油彩・キャンバス 130.0 × 162.0cm 1987年

Kimura Chuta *Early Summer B*



木村忠太（きむら・ちゅうた／1917－1987年）

高松生れ。1942年独立賞を受賞。43年帝国美術学校に学ぶ。48年独立美術協会会員。53年渡仏し定住する。70年サロン・ドートンヌ会員。パリで没、享年70歳。